

昭和の地名をたずねて(8)
入原
新たな原に開かれた
集落か!

入原は大字川額地内にあり、赤城山北麓利根川上流左岸に位置する。大字川額は川額、入原、永井の三組に分かれている。入原地内を沼田街道が通り、北に向かうと森下宿、南に向かうと永井南雲宿に至る。利根川沿いのため築漁が盛んに行われ、それに伴う争いも起こった。対岸の岩本地区と結ぶ渡船の発着場となる船戸という地名もある。

入原の地名の由来は諸説あるが「入」は入る、または入園、入学、入り会いというように新たに入るといふ意味があり、永井と川額の狭間の原に出来た新たな集落ではなからうと思う。この説は、かつて、古文書をはじめ作詩や絵画、歴史、文化財などに造けい深い山口重雄さんの師事によるものである。

時代の変遷に伴い、勢多郡のうちではじめ幕府領、延宝八年(一六八〇)安中藩領、元禄六年(一六九三)幕府領、同十二年旗本村越氏領、前橋県、群馬県を経て、明治二十二年、久呂保村の大字川額地内入原となる。

ここで、入原地区の珍しい小字名二カ所を挙げると、一つ目は、丸く取り巻くような地形をする「腰巻」という地名である。ここは女の腰のような形をしているのでそう呼ぶ。一つ目は「馬場」と呼ぶところがあり、これは貴重な馬の放牧地の名残であると思う。

ここ入原地区には堤姓が多くみられ、その中で戦前から戦後にかけて、映画、テレビで活躍された女優、堤真佐子は先代が入原の出自である。夫は、北沢彪である。機会があれば、人物伝として触れてみたいと思う。

本村には、県指定文化財が二カ所あり、入原地区の雲昌寺境内にある県天然記念物の大ケヤキがその一つである。すぐ近くに、未来を担う園児の元気な声が響く子育て保育園があり、活気を呈している。



雲昌寺の大ケヤキ

協力 沼田市図書館等

昭和村ボランティアガイドの会

会長 倉澤 俊雄



地域包括支援センターだより

認知症の人との コミュニケーションで大切なこと

「認知症の人とは、コミュニケーションがなかなかできない」と感じている方は多いと思います。けれども、次の5つのステップを意識することで認知症の方とスムーズにコミュニケーションができるようになります。

Step1 「あなた」をしてみてください

“その人”の正面にいき、笑顔をつくって「私はあなたを大切に思っています」と伝えます。大切なのは笑顔です。

Step2 目を合わせる

老眼の人や、視野がせまくなっている人もいますので、“その人”にとって適切な距離を意識しましょう。

Step3 話しかける

“その人”の名前を呼んだり、ゆっくりと優しく短い言葉で、身振り手振りを加えて話しかけます。

Step4 許可を取る

“その人”の意向を聞きつつ話をします。そうしないと、無視されたと思って意味のない声かけになってしまいます。

Step5 わかろうとする

しっかりと目と目を合わせ、あなたの心の窓を開け、向かいにいる“その人”の心の窓を開けることで、お互いにわかり合えるコミュニケーションをとることができます。



認知症の人の『気持ち』や『特徴』を考えながらコミュニケーションをとることで、お互いに信頼関係を築くことにつながります。ぜひ参考にしてみてください。



問合せ 地域包括支援センター ☎20-1126

